

The Heart of the Matter について

—洗練された感性の醜さ—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学教養学部

(1997年9月30日 受理)

I 序

*The Heart of the Matter*¹⁾の話が展開されるのは、第二次世界大戦のさなか、先進国がその軍事力と経済力とをもって開発途上の国々へ市場の開拓と原料の確保を目指し、その勢力拡大に鎬を削っていたアフリカの西海岸に位置するイギリスの植民地である。アフリカという土地柄からして、その海岸地方は未開の雰囲気があらゆるところに漂っており、まさに未開の世界への入口といった趣がある。従ってイギリス政府が統治するこの植民地はまさに未開の世界に築かれた文明の橋頭堡、いうならば、the outpost of progress 的存在なのである。そして誰の目にも文明と未開が渾然一体として存在する特異な地域である。

この植民地はイギリスが作った人工的な世界で、法と権力によって保護されている。その法と権力を象徴するのが、現地の警察に勤務する副署長のスコウビーである。彼の特徴は不幸に打ちのめされた者に限りない憐憫を覚えることである。そう書けば、彼は心優しい人物のように見えるが、憐憫は運命によって弄ばれ、痛めつけられた人々に彼が与えることのできる唯一の感情であり、人々の不幸を哀れみ、慰めてやりながら、そうすることによって弱い者、無力な者に襲いかかる不幸が引き起こす想像的な恐怖を自分自身が逃れたことに安堵する代償行為なのである。つまり、憐憫は劣っている者に対し優越する者が施す優劣を認識させる感情であり、自らの力の行使なのである。従って、強い憐憫を覚える人間は、裏を返せば、非常に高慢な人間であると言える。またその感情は弱い者を強い者の間に存在することを許す、つまり動物の世界では存在しない高度に進化し、美化された偽善的な人間感情である。その意味では、スコウビーは文明社会を代表する存在であり、逆に、非情なユーゼフは未開の世界を象徴する人間であると考えられる。そこでこの小論では西洋の文明社会を象徴する警察副署長のスコウビーと西洋文明に触れながらも多分に未開の要素を残した世界を象徴するユーゼフの二人の人間性を比較しながら、スコウビーの破滅への過程が彼の高慢な人間的性格の必然的な結果であることを明らかにしたい。

II スコウビー

我々は、自分の生活環境と生活体験によって自分の世界観を作り出していることは容易に理

解できるところである。イギリス社会で育ち、法の番人である警察官という職業に就いているスコウビーは、アフリカに赴任して15年間、この植民地で勤勉に公正な警察官として勤務してきた。そのこと自体が、ここアフリカにおいては非常に珍しいことである。

本国を遠く離れ、誘惑の多いこの地方では、何かにつけ賄賂がはびこり、汚職が横行し、多くの警官や官吏は、墮落していくか、この地方の何事においても甲乙を、黒白を、善悪をつけがたい不可思議さや混沌とした事実関係に圧倒されたり、熱帯特有の気候や病気にその生気を奪われて健康を害したり、正気を無くして本国に返還されるのが普通なのである。そういう社会環境の中で彼は長い年月まっとうな仕事を続けてきた。そして今は警察副署長として住民の厚い信頼を得ている。また部下に対しても「俺は警察副署長だ。百人の部下が俺の下で勤務している。俺は責任のある男だ。他の者たちの面倒を見るのが俺の仕事だ。」(p.260)、と考えている。このような事実からも彼が非常に責任感の強い男であることは明白である。また、長い結婚生活では親子の愛情とは違って、夫婦間の愛情は微妙に変化するのとは当然であり、愛情が冷めるのは決して異常なことではない。しかしスコウビーはそうした事実をルイズに対する憐憫の情で作為的に隠そうとする。これらは彼が文明社会の中で培ってきた彼の仕事や結婚に対する道徳観あるいは倫理観に基づいている。更に彼が契約社会の信奉者であることは、彼と神との関係に明示されていると考えられる。契約社会では法律によって人の行動を規制するが、宗教では目に見えぬ神と人との自発的な契約による関係をうち立てているのである。神とスコウビーとの関係は全く個人的なものである。聖餐を受ける前に告解をするかどうかは彼と神との約束事であり、告解をせずに聖餐を受ける行為を、神を冒瀆している行為であるという罪の意識を覚えるか否かは、全く個人の意識の問題であるが、かれはそれを強く意識している。このことから彼の育ってきた社会の過去の社会的理念や規範が宿命的に彼を支配していることは明らかである。スコウビーはその意味でまさに法治国家とその制度を代表する人物としてグリーンが描いている人物である。

Greene presents his protagonist as a system of apparent virtues which Scoubie himself has constructed to describe what he thinks are the motive behind his actions.²⁾

この法治国家とは社会の秩序を維持するために人為的に守るべき法を定めて、人にこの法を順守することを要求している制度である。この制度が成立するには基本的に社会の構成員の大多数がその制度を支持するという前提がなくてはならない。

ところがここ西海岸では西洋社会とは違って、いまだ社会的あるいは法的基準というもののはっきりと確立されているわけではないので、ことの善悪が定められた基準で判断されない。全ての事件や紛争の原因や経過が曖昧模糊としており、解決の糸口を見つけることは不可能に近い。ここでは彼のオフィスの錆びた手錠が象徴するように本国の基準で計れる正義も法も存在しない状態なのである。つまり、善悪の境界は不明なのである。その結果、「スコウビー自

身やがて有罪か無罪かは富と同じように相対的なものだということを知った」(p.12) ののである。従ってここの不十分な社会的成熟度は、善悪を法によって裁くのではなく、何事も妥協によって、黑白をつける過程を省き、ことを処理することをスコウビーに要求している。その妥協を司る人間として金銭に目が眩まなかった彼は公正に振る舞い、些細なもめ事の全てを裁き、取り仕切るようになってしまった。その結果、彼を信頼する現地人の間では自分が全能の神と同じ立場にあるかのようにスコウビーは錯覚している。だが、本来、彼は警察官としても、有能な人物とは考えられない。何故なら彼はこの僻地においても次々と後輩に先を越され、警察署長に昇進する機会を与えられることもない。副署長とはいいいながら、彼は下級職員や外国人の商人が住むような粗末な住宅に追いやられている。

Scoubie had been out-manoeuvred in the interminable war over housing. During his last leave he had lost his bungalow in Cape Station, the main European quarter, to a senior sanitary inspector called Fellowes, and had found himself relegated to a square two-storeyed house built originally for a Syrian trader on the flats below — a piece of reclaimed swamp which would return to swamp as soon as the rains set in. (p. 13)

彼はイギリスという激しい競争社会の中では決して頭角を現す人物ではあり得ない。ここアフリカの辺鄙な西海岸でこそ現地人に頼られる存在となりうるのである。スコウビーのような人間でも土着の人々から敬意を扱われることが、彼の虚栄心をくすぐり、それに彼独特のセンチメンタリズムが加わって、途方もなく自分自身を高く評価しているが、現地人は彼の背後にある権力に敬意を払っているのである。だから彼はあくまで法の番人として公平に振る舞っておれば、問題はなかった。しかし彼は、15年にわたる実績、署長からの信頼、現地人の彼に対する尊敬などから生じてきたこの土地に対する愛着、他の警察官にはない自信から、「彼は人々を完全に理解している、だから彼等の幸せまで面倒見ることができると信じている」³⁾。だが、警察官としての職務の限界を超えて、個人的感情を植民地での諸々の問題に持ち込んだことが問題なのである。それは彼の関知するところではないはずなのに。

... , the idea of a virtue, falsely applied, may not only cease to be virtue but may actually become sin. In Scoubie's case, an exaggerated responsibility directed exclusively toward human beings shifts subtly into a proud desire to control other people's lives.⁴⁾

例えば、ロルト婦人の不幸にスコウビーがどれ程の責任があるのか？警察副署長として、難船漂流者の受け渡しに立ち会うことは彼の職務であろうが、それ以後のことは、彼の個人的な感情であって、職務や職責とは無関係である。もし責任があるとしても、警察には彼の上司である署長がいる。それにもかかわらず、スコウビーは次のように考える、「バグスターは責任

をとるような男ではない。それにどうして愚かな世間知らずの子供のような者に何らかの行動の責任を取らせられようか？」(p.181) これは彼の身勝手な口実であり、良く言えば、彼は弱い者の神たらんと欲し、悪く言えば、弱い者の支配者たらんと欲しているということになる。彼が警官という職業を天職のように考えるのはまさにこうした役割を演ずることを期待する潜在意識が働いているからである。だから、警察を退職しなくてはならない時のことを思うと彼の神経はひきつるのだが、それは彼の仕切れる世界の必要性を彼自身が強く認識しているからなのだ。つまり、「彼は責任を負わずにどのように生きていけばいいのか分からないのである。」⁹⁾何という高慢さであろう。しかし、これに対してグリーンはスコウビーが過去の経験から次のことを認識していたと述べている。

If I could just arrange for her happiness first, he thought, and in the confusing night he forgot for the while what experience had taught him — that no human being can really understand another, and no one can arrange another's happiness. (p. 93)

このことは、他人の責任まで背負い込むことは、自己破滅の種子を自らの内に培養しているようなものであるとグリーンは言いたいのであろう。何故なら、責任とは各人の心の中に生きている意識であって、それが倫理の根元をなすべきものであると意識する人間にとって、もしその人が神ではなくて、人間だったとしたら、責任を我が身にとろうとするほどの人は、結果の恐ろしさを予測して、自己の活動神経を立ちすくませて、無為と沈思とに自己を追い込んでいく以外、責任をとらなければならないならならぬ自己の行動範囲を最小限にすることが、少なくとも生き残るすべということを経験すべきである。彼が本当に責任ある人間なら、感情に押し流されて、事態の解決を先に延ばすべきではなく、ルイーザやヘレンにとって辛いことであっても、彼自身にとって言いにくいことであっても、事実を認識し、彼の拠って立つ基準に従って理性的に行動すべきである。このような未開と文明が複雑に絡み合っている社会では、人は文明社会の基準に忠実に従うか、それとも野生の生き方に倣うかのどちらかを拠る所として求めなくてはならない。どちらかに徹底せずに生きることは混乱を来し、絶望するか、自己破滅に行き着く。グリーンは「絶望とは不可能な目的を自らに課した者が支払う代償なのである」(p.62) という。スコウビーは、その原則を忘れ、責任を負わなければならない範囲を自らの虚栄心と憐憫から拡大し、その責任の大きさに我ながらうんざりしているのである。例えば、ルイーザを南アフリカに行かせる費用の200ポンドを工面する当てもないのに、彼女に安請け合いをして一人悩み、挙げ句の果てはルイーザの乗っている船が帰路の途中で沈むことを期待したりする。

If he had been returning to an empty house he knew that he would have been contented. He was tired and he didn't want to break the silence — it was too much to hope that Louise would

be asleep, too much to hope that things would somehow have become easier in his absence. . .
 .(p. 105)

これは誰に対しても好ましい人物であろうとして原則を無視したスコウビーの八方美人的な性格と、アフリカ西海岸という植民地で現地人に囲まれているため高慢にも自分が実力者であると錯覚したことによるものであり、それが彼の自己破滅の最大の原因といえる。

彼を破滅に導いたもう一つの特徴は彼が何に対しても憐憫の情を覚えることである。それは彼の極度の感傷性に起因するものであるかもしれない。彼の考えるところを見てみよう。

What an absurd thing it was to expect happiness in a world so full of misery. . . . But one still has one's eyes, he thought, one's ears. Point me out the happy man and I will point you out either extreme egotism, evil – or else an absolute ignorance.

Outside the rest-house he stopped again. The lights inside would have given an extraordinary impression of peace if one hadn't known, just as the stars on this clear night gave also an impression of remoteness, security, freedom. If one knew, he wondered, the facts, would one have to feel pity even for the planets? if one reached what they called the heart of the matter? (pp. 138–39)

そしてまた、次のようにも言う。「親は生きている間、自分の子供がゆっくりと死んでいくのを見ているのだ」(p. 140) と、何という悲観的で、感傷的な考え方であろうか？更にバグスターがヘレンを墮落させるかのように言うが、それは良く言えば、彼の思い込み、悪く取れば、ヘレンと彼の関係を維持させる口実にすぎない。彼には現実を多面的にとらえず、このように自分勝手な世界を想像する癖がある。だからユーゼフはウィルソンの正体を知らないスコウビーに「貴方以外みんな見当を付けていますよ」(p. 103) と、馬鹿にしたように言うのである。その上彼は非常に大袈裟な言葉使いを好んでする傾向がある。例えば、ヘレンへの手紙では、「私は自分自身よりも、家内よりも多分神よりも君を愛している。私は一生懸命真実を語ろうとしているのだ。私はこの世の何にもまして君を幸せにしたいのだ。」(p. 209) と。スコウビーは目の前にいる人間に対する憐憫や一時の激情に流されて、相手を傷つけない言葉を口にしてしまう。その結果、現在の自分の言動と過去、未来の言動の一貫性と整合性を欠くことになる。まさに「他の警察官は金によって墮落した、そしてスコウビーは感情によって墮落した」(p. 56)。彼は瞬間的な幸福のために、幸福の幻影のために、苦悩と不幸の長い年月を作り出しているのである。彼はあらゆる打算、熟慮を忘れ、確実な破滅へと突き進んでいるのである。だが彼はそうした自分の言動を次のように正当化している。

The truth, he thought, has never been of any real value to any human being - In human relations kindness and lies are worth a thousand truths. He involved himself in what he always knew was a vain struggle to retain the lies. (p. 59)

実に勝手な論理と言わざるを得ない。また、スコウビーには亡くした娘のイメージに繋がる女性に対しては無限に没我的な憐憫に走る衝動があるが、それは彼の高慢さで、彼の憐憫は彼の過去に根ざした利己心から離れたものではない。だから船長の泣き言に容易に心を動かされ、職責や、組織の規則を踏みにじり、個人的な行動に出る。全く無責任であり、芝居じみている。マクエワンの言を借りれば、「スコウビーの利己的な憐憫と愚かさは明らかである。」⁶⁾具体的にそのいくつかの例を見てみたい。スコウビーが署長になれないために社交クラブでも屈辱的な思いをしているルイズ、彼の仲間内から文学少女とあざ笑われているルイズ、若さと魅力を失った中年の醜くなったルイズ。そのような彼女に強い憐憫の情を覚えるが、その哀れなルイズのためにできるだけのことをしてやりたいと思う憐憫を愛情の代用とすることによって無意識のうちに良心の呵責をなだめ、倫理的な責任を果たそうとしている。またヘレンに対しては、過酷な運命に弄ばれている幼い無力な女性として見ている。従って、ヘレンに対するスコウビーの感情には憐憫と善行を混同して自分は善なる行為を行っている人間であると勘違いしているが、ヘレンは激怒してスコウビーに「貴方の哀れみなど欲しくないわ」(p. 205)、と言り返す。ヘレンは救助された後もそそくさと病院を出たが、「彼女がおそれていたことは同情を受けるという恐ろしい責任であった。」(p. 156) からである。そしてルイズも「何年も前から分かっていたのよ。貴方が私を愛していないのは。」(p. 59)「ティッキー、貴方は私を愛しているとも言わないのね。ねえ、一度でいいから言って。」(p. 60)、と哀れみではなく愛を求める。ルイズもヘレンもスコウビーに愛されているのではなく、哀れまれていることに屈辱感を覚えているのである。

スコウビーはまるで神の代理者のごとく憐憫を施しているように錯覚しているが、憐憫は人を辱める行為であり、裏を返せば、彼の羞恥心のなさの表現であり、自分の感情を満足させるための利己的な行為といえる。そしてヴィクトル・ド・パンジュは『憐れみは苦痛を「見ることに耐え得ない感性の病気』⁷⁾と述べている。いわば憐憫は彼の不治の病なのである。ケリーはこの点について「スコウビーの性格は、憐憫が途方もない高慢さの表現となることを示すように意図されている。」⁸⁾と述べている。そしてメセネットは「憐憫は真実に直に対峙できない者、あるいは自己中心的な平安にとって障害となるものに耐えられない者、すなわち、弱者にとっては、楽な逃げ道である』⁹⁾と述べている。

III ユーゼフ

ユーゼフという人物はシリア人で、ここアフリカの西海岸のイギリス植民地で手広く商売をしている人物である。彼の置かれている社会的環境からして、彼がこれまでにいろんな修羅場を

くぐり抜け、生き延びてきたことは想像できる。彼はとにかく悪い噂の立つ男で、多くの警察関係者を買収して、工業用ダイヤをイギリスの敵国であるドイツに密輸しているとの噂もある。だが、彼はスコウビーとは違って、ある意味では *The Power and the Glory* の主任警部や *It's a Battlefield* の警視副総監の生き方と共通した面がある。*The Power and the Glory* の主任警部は、社会主義国家の実的な指導者がどのような連中であるか、現状が如何なるものであるかは別にして、社会主義国家体制の理論に全幅の信頼を寄せて、国民のために自分は正義を行っているという信念を持って行動している。また、*It's a Battlefield* の警視副総監も政治や経済、倫理、道徳、或いはことの善悪とは一線を期して、ただ犯人逮捕という警察の職務に忠実な人間である。この二人には信念があり、その行動には首尾一貫性がある。彼等とスコウビーを比較するとき、スコウビーはあまりにもいろんな事柄に私情を挟みすぎるのである。つまり、前述した二人の警察関係者にも暖かい感情はあったが、それに勝る信念と責任感が彼等の行動を支配していた。ところがスコウビーの場合、行動の基準は信念や責任感ではなく、感性に大きく影響されるところに問題がある。

ユーゼフの基本的な生き方は何が何でも生き残るといふ生き方である。彼はこの植民地では外国人であり、もしイギリスがドイツに負ければ、彼がこの土地で築き上げてきた資産がどうなるのか全く不明である。またイギリスが勝ったとしても、タリット以外にも競争相手が出現するかもしれない。生き残るためには、法を犯しても、資産を高価なダイヤに換えてこの植民地以外の土地にも分散しておかなくてはならないし、商売上の競争相手はどのような手段を使ってでも負かさなくてはならない。彼の世界では予期せぬどのようなことでも起こりうる可能性があり、それに対処しなくてはならない。起こりうる事柄にたいし、感情を挟む余地はない。だから「絶望は墮落した者や不正な人間が決して犯すことのない罪」(p.62) と言えるのだ。何故なら悪人や墮落した人間には結果を経験的に予測し得るから絶望的な暴挙はできない。彼の世界には文明社会でいう規則も、道徳も、善悪も信義も存在しない。彼の世界は多様性と矛盾に満ちた世界である。彼は悪びれた様子もみせず、ルイズに反物や彼女が必要とする品物、スコウビーにはビールやウイスキーなどの提供を申し出て公然と彼を買収しようとする。その様は、文明の力と原始の力の競り合いの様子を呈している。ユーゼフに対して初めの内こそ、出稼ぎ商人的なシリア人に対してスコウビーには支配者的、威圧的な態度がうかがえる。しかし、後半に入り、その立場が逆転しても、ユーゼフにはスコウビーに対しても誰に対しても感傷的な対応はなく、自分の有利な立場を最大限に利用して、時には哀願し、時には脅迫する。その態度には、狙った獲物を追いつめていく獣の狡猾さが伺える。まさに彼の生き方はジャングルの弱肉強食の世界である。彼のとる行動の一つ一つがこの不安定な世界で生き残っていくことを大前提にした計算された行動であることが明白に見て取れる。実際、「ユーゼフは力というものをよく知っている、だからどのような状況の下でも彼を信用することはできない。」¹⁰⁾とミラーは述べているが、ベンバートンの自殺を目にしたとき、スコウビーは、「ベンバートンの自殺は、他人に依存すれば何処に行き着くか、もし身辺を整理し、孤独

の重荷に耐えられなければどうなるかを示すものである。』¹¹⁾ことを認識して、この世界では自分の信条を後生大事に守って生きることを知るべきであった。

ユーゼフは存在する権力をあからさまに否定するのではなく、実際的に、また少しづつ實際生活に対するあらゆる作用を賄賂と策謀によって権力から取り除いているのである。そして自分が何をしているのか十分知り尽くしている。スコウビーを脅迫した後、彼の前では、スコウビーの属する世界の基準に照らして、「私は卑しいインド人のようなものです。」(p. 233)などと卑下してみせるが、彼にとっては、思惟的な倫理観などは二義的なものであり、不正や不道徳は人間の作った観念であって根元は自己の生存にとって有利なことをするという態度が明白に現れている。だから彼は、自分を文明社会でいう「悪」と規定することによって、全てが許される条件を獲得して自分の行為に邁進できる原動力としている。だから、彼の妻に対する態度は、スコウビーのような道徳観や倫理観に囚われた夫と妻という関係から全く離脱し、動物的な雄が雌を求めように感情の赴くままに行動するのである。マリア・クートは「墮落した世界の一部としてユーゼフが存在する。』¹²⁾と述べているが、むしろ彼はこのアフリカの未開の地が持っている原始的で野蛮な生命を象徴する力であり、文明社会が、法や倫理、規律といった檻の中に閉じこめてきた人間の心の深奥に巣くう「悪」或いは「始源性」と考えるほうがいいのではないだろうか？そしてここ未開の世界に接する文明の最前線ではまだまだその原始の力は文明世界にとっては脅威である。そこはまだ文明社会の概念が原住民に十分理解して受け入れられていない世界であり、「自然な悪が人間が支配することのできない状況の中から生じてくる』¹³⁾世界なのである。この世界で力強く生きているユーゼフの言葉がいつまでも心に残る。

‘... There is a Syrian poet who wrote, “Of two hearts one is always warm and one is always cold: the cold heart is more precious than diamonds: the warm heart has no value and is thrown away.”’ (p. 104)

必然性の信奉者は永遠の過去からそうであったありのままの形で、永遠の未来に至るまでその姿のまま人生を愛していくことになる。なぜならそういう人間には良心の呵責に苦しむことはないからである。

IV 結 語

人間の生活そのもののなかに姦通や裏切り、殺人といった行為が存在しないだろうか？そのようなことは日常茶飯事として我々は毎日目にし、耳にする出来事である。しかしながら、我々は社会の定めた約束事を自分を含めて全ての構成員が守るであろうと信じているから、その約束事を破ると罪の意識に苛まれたり、破った人間を非難することになる。この世で生きていくには人為的な約束事の信奉者になるか、それとも全てのことを肯定する必然性への信奉者

になるかの選択を迫られている。従って、我々が選択できる方法はそう多くあるわけではない。ユーゼフのように自分に忠実であり、自分の行動に善悪の基準を持ち込むことはせず、道徳の掟が有益なものであるか、それとも有害なものであるか、また、道徳の掟が社会組織の堅牢を守るものであるか、それとも破壊するものであるか、そんな問題が入り込む余地は全くない自分の生存のみを最重要視する生き方がある。それとは対照的に *The Power and the Glory* の主任警部や *It's a Battlefield* の警視副総監のあの私情を挟まぬ信念に基づいた生き方がある。彼等にいえることは強い信念と倫理観を備えていたが、職務に関しては己に対する傲慢さがなかったことである。

スコウビーにとって「生きることは憐憫と責任を感じることで、絶対的な心の平安は獲得できない」のである¹³⁾。他人の責任を自ら背負い込むが、その傲慢さが彼を退き引きならない事態に陥れる。彼は神を冒瀆し続けることを畏れて、死を選ぶかのように説明しているが、実際は、彼自身の虚栄心と面目を維持したい（誰にでもいい人でありたい）問題でしかない。その意味で「貴方は自分自身以外、あさましい自分自身以外はだれも愛さない」(p.281) とスコウビーにいうウィルソンの言葉は的を得ている。傲慢さを内在している倫理観の擁護者は自らのうちに秘めた悪と傲慢を相手に戦い、結局は自己の内にある倫理観への傾倒が強ければ、強いほど、悲劇的な結末を迎えざるをえない。すなわち自己破滅の最大の要因である「憐憫が彼の心の中で腐敗物のようにいぶっていた。」(p.205) ので、スコウビーは憐憫が引き起こす地獄からは生涯脱出することはできない。そうなる「人格の放棄は苦悩と悪からの解放を求める方法の一つである」¹⁵⁾とメセネットは述べているが、スコウビーには、死を選ぶ以外、心の平安は得られないであろう。メセネットは憐憫は弱者の楽な逃げ道と言ったが、その逃げ道は、死に繋がる逃げ道とは皮肉なものである。スコウビーは自ら死を選んだが、結局、時間と世界の動きのなかには掟もなければ裁き手もない。それぞれの個人が自身の掟であり、裁き手であるということになるのだろう。

Notes

- 1) Graham Greene, *The Heart of the Matter* (London: William Heineman & The Bodley Head, 1983), 以後、同書からの引用は頁数のみを本文中に記す。
- 2) Anne T. Salvatore, *Greene and Kierkegaard: The Discourse of Belief* (Tuscaloosa and London: The University of Alabama Press, 1988), p.76
- 3) Graham Smith, *The Achievement of Graham Greene* (Sussex: The Harvester Press, 1986), p.99
- 4) Anne T. Salvatore, p.77
- 5) Robert O. Evans ed., *Graham Greene: Some Critical Considerations* (Lexington: University of Kentucky Press, 1967), p.171
- 6) Neil McEwan, *Graham Greene* (London: Macmillan, 1992), p.68
- 7) 窪田啓作・窪田毅弥訳、ヴィクトル・ド・パンジュ著、『グレアム・グリーン—人と作品—』、東京、河出書房、昭和31年、p.100
- 8) Richard Kelly, *Graham Greene* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1984) p.57
- 9) Marie Beatrice Mesnet, *Graham Greene and the Heart of the Matter* (Westport, Connecticut: Greenwood

- Press, 1972), p. 65
- 10) R. H. Miller, *Understanding Graham Greene* (Columbia : University of South Carolina, 1990), p. 74
 - 11) Robert O. Evans, p. 170
 - 12) Maria Couto, *Graham Greene : On the Frontier* (London : The Macmillan Press LTD, 1988), p. 121
 - 13) R. H. Miller, p. 70
 - 14) Kenneth Allott and Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* (New York : Russell & Russell, 1963), p. 241
 - 15) Marie Beatrice Mesnet, p. 65

On The Heart of the Matter
— Ugliness of Refined Feeling —

Toshihiko UEKI

Faculty of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1997)

Scoubie is a man of pride and honesty. Pity is the most striking one of the qualities composing Scoubie's character. He always feels deep pity for poor persons who remind him of his dead daughter. He thinks that he has a responsibility to arrange their happiness for them and has such a will. But his speech and behavior which are easily carried away by passion and sentimentality are not consistent with his will. Consequently, there come about many contradictions and inconsistencies among his speech and behavior. These facts drive him into a difficult position which can not save his face and keep his pride. The only way to keep his pride and save his face is to kill himself.

I intend to prove in this paper that the main cause of his destruction is due to his character itself.